人権通信　保護者版 Vol.3

しらかべ

創立 100 周年ロゴマーク

２０１６年１２月１２日　人権・同和教育部発行

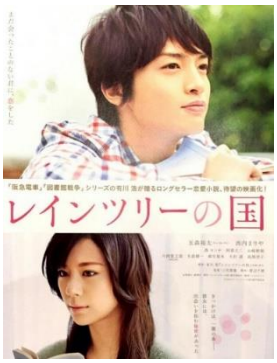
師走の候、保護者の皆様方におかれましてはご健勝のことと存じます。日頃は本校の人権･同和教育にご理解とご協力をいただき厚くお礼申し上げます。

さて、今月号は２学期に行った人権・同和教育 LHR で学んだ生徒の感想を中心に紹介します。ぜひ、ご家庭でお読みいただければ幸いです。また、LHR 後に家庭で話し合った内容や「しらかべ」をお読みいただいた感想や本校の人権・同和教育の取り組みについてのご意見などがありましたら、**別紙返信用紙にご記入の上、２学期保護者懇談の折に担任の先生にお渡しください。**

第 68 回全国人権・同和教育研究大会　ー生徒が主体的に取り組む人権・同和教育ー

11 月 26・27 日に大阪市において第 68 回全国人権・同和教育研究大会が開催され、坂出高校の取組を報告しました。7 月に四国地区人権教育研究大会で「生徒が主体的に取り組む人権・同和教育 LHR の展開」を報告し、今回は、その続きで各学年の「現地訪問学習会」での学び、異学年の生徒同士の学習会、人権通信を通した保護者啓発などの取組を報告しました。この報告では、新しい方法を用いて人権・同和教育を行うことよりも、生徒全員の人権・同和問題に対する意識の変容に焦点をあて、LHR や人権だよりなど、従前から行われている手法を見直すことで、その意義を再確認しました。人権・同和教育は、それぞれの学校や生徒の特色を生かした内容・手法であればあるほど、生徒が主体的に学ぼうとします。本校では、10 数年続く現地訪問学習会を通しての学びをなかまに伝えることで共有するだけでなく、LHR を含めた学習を生徒中心で行うことで学びがより深まり広がっています。これを坂出高校の人権・同和教育の大きな特徴として、今後も継続したいと考えています。そして、香同教大会、四人研大会、全人教大会の報告に向けた取組で学んだこと、大会の中でいただいた貴重なご意見を受け止め、これからもしっかりとした実践を積み重ねていきますので、今後ともよろしくお願いいたします。

人権映画鑑賞会　「レインツリーの国」



12 月 7 日（水）、坂出市民ホールにおいて、1･2 年生と保護者を対象に人権映画鑑賞会を開催しました。「レインツリーの国」原作は、「阪急電車」、「図書館戦争」シリーズなどの人気作家・有川浩さん。また、この映画は、文部科学省が共生社会の形成に向けて、障がいのある子どもとない子どもが可能な限り共に教育を受けられるよう配慮する「インクルーシブ教育システム」の理念を広く浸透させることを目的として、推奨した映画です。主人公と聴覚障がいのあるヒロインが、当初は衝突しつつも徐々に距離を縮めていく過程が繊細に描かれており、人と人が相互に理解することのすばらしさを伝える映画でした。鑑賞した生徒は、「障がいがある・ないに関係なく、支え合い、誰もが安心して暮らせる社会にするにはどうしたらいいのだろうか。人それぞれにある個性を受け入れる心こそが今足りないのではないだろうか。お互いを尊重できる人になりたい」と感想を寄せました。素敵なラブストーリーからそれだけではない多くのことを学びました。ぜひ、この作品について、ご家庭で話し合ってみてはいかがでしょうか。

＜1 年生2学期の取り組み＞

～ハンセン病とそれに関わる人権課題について学ぶ～

２学期の人権・同和教育 LHR では、ハンセン病とそれに関わる人権課題について学びました。

まず、事前学習として、７月 LHR で「ハンセン病とその差別の歴史」について学習しました。そして、８月 25 日に各クラスのホームルーム委員 26 名と教職員８名が高松市庵治町にある国立ハンセン病療養所大島青松園を訪問しました。そこでは、入所者の方から話を聞き、療養所内を見学しました。

そして、９月 LHR では、この訪問学習をもとに現地研修の様子をまとめた VTR を視聴しました。この VTR は本校の放送部がナレーションをいれて編集しています。代表生徒が LHR で司会運営をしながら現地研修で学んだことを伝え、大島青松園にある施設や療養所での生活について学び合いました。

以下に、学習を終えた生徒の感想（一部抜粋）を紹介します。

瀬戸内海に浮かぶ大島

モニュメント「風の舞」	解剖台

○人生は一度きりなんて言うけれど、その自分の人生を国によって狂わされたら私は絶望します。それでも強く生きている方に対して差別するなんてひどすぎます。あの美しい島には残酷で冷酷な過去があることを知りました。差別を繰り返さないためにも、知識が必要です。だから、私はさらに学び、大島に行きたいと思います。

○名前を名乗ることもできず、家族が遺骨を引き取りに来ることもできないということが未だに続いていることにとても驚いた。…入所者の方が亡くなってしまいこのことが風化されていいわけではなく、私たちが次の世代につなげていかなければいけないし、正しい知識をもって「ハンセン病」について考えていくべきだと思いました。

○ハンセン病元患者さんの「どんな人生でしたかとよく聞かれます。テレビ受けするような答えはできない。ただただつらい人生だった」という言葉を聞いて、胸がしめつけられるように感じた。

○「知らない」ということは本当に怖いことだと思いました。私たちの役目は、このような、知らなくてはならない事実を後世に伝えることだと思います。いつかは、ハンセン病元患者さんは、亡くなり、いなくなります。元患者さんは、誰よりも差別のことを後世に伝えることができます。その方がなくなってしまうということは、私たちの世代がバトンを受け、それをまた次の世代へと渡していくということだと思います。決してすべて終わったということではありません。

生徒の意見にもあるように、入所者の方の思いをしっかり受け止め、現在の問題点やこれからの課題について、より一層「全員」が考える必要があると思います。無知・無関心の延長上の「知っているだけ」にならないためにも。そして、「身近な人だけ」の境界をなくし、「すべての人」の人権を尊重できるように取り組みを重ねていきます。

３学期は、「障がい者をとりまく問題」と「インターネットと人権」について学習する予定です。

さまざまな事象　　どのように感じとらえて　行動していくのか